村上春樹「ノルウェイの森」論
―「緑」への手記―

山根由美恵

はじめに―閉じられないテクスト―

「ノルウェイの森」（昭62・9）は回想の物語である。三十七歳の「僕」がビートルズの「ノルウェイの森」を聞き、激しく混乱するところから物語は始まる（第一章）。テクストは、この混乱から、「僕」が死んでしまった「直子」を思い出し、その後「この文章を書きつづけている」（第一章）という体裁を取っている。そして、第二章以降「直子」が生きていた十七歳から二十一歳までの過去が始まる。ところが、結末は「直子」の自殺によって精神喪失してしまった「僕」が自己回復をかけて、愛し始めていた「緑」に電話するところで終わる。つまり、「直子」への想いをいかに清算したかという、回想の出来事に対しての決着が付けられず、その終り方は唐突である。いわば回想の物語として閉じられていないテクストなのである。この問題について今井清人氏は次のように述べている。[1]

> 回想という形で語りだされた『ノルウェイの森』の物語は、〈記憶〉を秩序付けて〈今・ここ〉にいたる教養小説的性格をもっている。だから「僕」が〈成熟〉＝緑の方向に進むことは当然である。だが、その予定調和は完全には成立しない。物語の最後には「僕」がレイコさんを見送った後、緑に電話をかけ「何もかもを君と二人で最初から始めたい」と申し出る予定どおりの場面が用意されるのだが、最終的には自分が今どこにいるのかわからなくなった「僕」が「どこでもない場所のまん中から緑を呼びつづけていた」という件りで閉じられている。これは回想のコードに対する裏切りではある。が、こうした結末は、〝物語〟の線のみが強調されてしまい、安易に円環が閉じられてしまうことの回避を図ることにもなる。そして登場人物たちがメタレヴェルで役割として整理されてしまうことを回避して彼らへのシンパシーを持続させもするのだ。（中略）
>
> 「僕」は〝記憶〟を整理し理解するために、この〝物語〟を語り始めた。けれど、「僕」には語りだし、そして戻ってくる〈今・ここ〉を定めることができないのだ。「僕」はまだ彷徨を続けなければならない。

確かに「ノルウェイの森」を回想の物語として読む視点に立てば、冒頭と結末とは違和感を感じる結構になっている。しかし、「ノルウ

エイの森」は単なる回想の物語ではない。回想の物語を書き綴る「僕」の物語でもあるのだ。このような手記性（記録性）に着目すれば、「僕」が「直子」との過去を記録すること、更にその記録が何のために行われたかということの意味が改めて問われなければならない。

結論を先取りして言えば、「直子」への鎮魂・「僕」自身の「自己療養」などと解されているこの手記は、「緑」へのメッセージ性を強く内包しているテクストであると位置付けられるのである。本稿では、「直子」との約束が強調された冒頭と結末における「緑」への強い指向というアンヴィヴァレンスな関係を「ノルウェイの森」の手記性に着目し、連鎖する二つの原罪の構図から解明したい。

一　手記の性格

先ず、「僕」の手記に対する姿勢について考えてみたい。「僕」はこの手記を綴ることについて次のように述べている。

しかし何はともあれ、今のところはそれが僕の手に入れられるものの全てなのだ。既に薄らいでしまい、そして今も刻一刻と薄らいでいくその不完全な記憶をしっかりと胸に抱きかかえ、骨でもしゃぶるような気持で僕はこの文章を書きつづけている。直子との約束を守るためにはこうする以外に何の方法もないのだ。（前略）でも今はわかる。結局のところ――と僕は思う――文章という不完全な容器に盛ることができるのは不完全な記憶や不完全な想いでしかないのだ。そして直子に関する記憶が僕の中で薄らいでいけばいくほど、僕はより深く彼女を理解することができるようになったと思う。何故彼女が僕に向って「私を忘れないで」と頼んだのか、その理由も今の僕にはわかる。もちろん直子は知っていたのだ。僕の中で彼女に関する記憶がいつか薄らいでいくであろうということを。だからこそ彼女は僕に向って訴えかけねばならなかったのだ。「私のことをいつまでも忘れないで。私が存在していたことを覚えていて」と。

そう考えると僕はたまらなく哀しい。何故なら直子は僕のことを愛してさえいなかったからだ。（第一章）

ここで、「僕」は「直子」との約束を守るために、「この文章を書きつづけている」と目的を述べている。「直子」との約束とは、「私のことをいつまでも忘れないで。私が存在したことを覚えていて」とあるように、「直子」の存在を「僕」が忘れないでいるというものである。「僕」は「直子」の記憶が「既に薄らいでしまい、そして今も刻一刻と薄らいでいく」という危機意識を持ちつつ、「薄らいでいけばいくほど、僕はより深く彼女を理解することができるようになった」という思いで執筆している。

この「僕」の書く行為の意味について、「『僕』は〝記憶〟を整理し理解するために、この〝物語〟を語り始めた」（前出　今井氏）、「僕」の心の傷を癒すために語る「自己療養の試み」（遠藤伸治氏）[2]といった「僕」の問題として解そうという論考があった。また、文字通り「直子」への鎮魂に繋がるという見方も可能であろう。確かに「僕」自身の過去の清算や「直子」への鎮魂という意味も「この文章」の性格に

含まれるだろう。しかし、それだけでは自己の位置を見失ってしまった「僕」が「緑」を呼び続けている結末部を説明することができない。

ところで、「ノルウェイの森」が手記であることについて、明確に問題化したのは木股知史氏である。[3] 氏はこのテクストの手記性に関して「さまざまなかたちで他者の言葉が入り込んできている」と捉え、その他者の言葉（物語）が「僕」の手記という枠を越え、「『書き手』の〝私〟の作為が壊される」と論じている。そして結末を次のように分析した。

> 回想者の三十七歳の「僕」にも、若い「僕」にも帰属しない未知の「僕」がかいま見るのは、描かれない空白の中にしまいこまれている荒野の感覚である。そしてそれこそ、直子の内部にうづまいていた当のものだ。

木股氏は結末部の「僕」が混乱し、その混乱こそが「直子」と「僕」とを結びつけていると捉えた。しかし、結末部の「僕」の混乱を「直子」との関係に還元させることには疑問を感じる。そのことを明らかにするために、「僕」の語りと手記との関係を確認しておきたい。

第二章から始まる本格的な回想が語られる直前、第一章の末尾にある一文（「そう考えると僕はたまらなく哀しい。何故なら直子は僕のことを愛してさえいなかったからだ」）は、「僕」と「直子」との関係に一つの強い指向を与えるものである。確かにテクストには、「直子」が「僕」を愛していないと思わせる記述が散見する。

> 彼女は僕の腕に腕を絡めたり、僕のコートのポケットに手をつっこんだり、本当に寒いときには僕の腕にしがみついて震えたりもした。でもそれはただそれだけのことだった。彼女のそんな仕草にはそれ以上の意味は何もなかった。僕はコートのポケットに両手をつっこんだまま、いつもと同じように歩きつづけた。僕も直子もゴム底の靴をはいていたので、二人の足音は殆んど聞こえなかった。道路に落ちた大きなプラタナスの枯葉を踏むときにだけくしゃくしゃという乾いた音がした。そんな音を聴いていると僕は直子のことが可哀そうになった。彼女の求めているのは僕の腕ではなく誰かの腕なのだ。彼女の求めているのは僕の温もりではなく誰かの温もりなのだ。僕が僕自身であることで、僕はなんだかうしろめたいような気持になった。（第三章）

> 「いいわけするんじゃないけど、辛かったんだよ」と僕は直子に言った。「君と毎週のように会って、話をしていて、しかも君の心の中にあるのがキズキのことだけだってことがね。そう思うととても辛かったんだよ。だから知らない女の子と寝たんだと思う」（第六章）

しかし、本当に「直子」は「僕」のことを愛していなかったのであろうか。次項では、第一章の末文と相反し、実際は「直子」が「僕」を愛していたと思わせる記述が手記の中に存在することを明らかにしたい。「僕」の語りと手記との間にはある種の齟齬があり、そこには二つの原罪が深く関わっているのである。そして、この二つの原罪は現在（三十七歳）の「僕」と結末部の「僕」との関係を解明する鍵と

なっていると考えられる。

二　連鎖する死の構図―「直子」の愛と罪―

先ず、第一の原罪、すなわち「キズキ」を死に至らしめた（と感じている）「直子」が自殺していく過程を、「僕」との関係に絡めながら検討する。

先行研究では「ノルウェイの森」の「恋愛小説」性に関して様々な論考があるが、「僕」と「直子」との関係に恋愛要素は薄いと考えられているようである。黒古一夫氏は「『僕』と『直子』の関係に〈愛〉はあるか。ここにあるのは〈優しさ〉だけではないのか」[4]と述べ、加藤典洋氏は「直子」を「僕の分身」と捉え、「僕」と「緑」の物語に分身「直子」の物語が重ねられた「内的世界からの回復を描く物語」[5]と位置づけている。

更に、竹田青嗣氏[6]、吉田春生氏[7]は、「ノルウェイの森」は「恋愛小説」ではなく、「自閉」した「直子」と「僕」とのすれ違いに重点が置かれた、村上作品にこれまで描かれてきた自意識の物語であると位置づける。また、三枝和子氏[8]も近代小説と比較しながら、「ノルウェイの森」は「恋愛小説」ではなく「夫婦の心境小説」と結論づけている。

「直子」は、恋愛対象ではなく、精神を病んだ人間としての側面が強調されてきた。しかし、その苦しみの原因は「直子」と「僕」と「キズキ」という三人の関係性にあることは間違いない。

それでも僕が中に入ると彼女はひどく痛がった。はじめてなのかと訊くと、直子は肯いた。それで僕はちょっとわけがわからなくなってしまった。僕はずっとキズキと直子が寝ていたと思っていたからだ。（中略）最後には直子は僕の体をしっかり抱きしめて声をあげた。僕がそれまでに聞いたオルガズムの声の中でいちばん哀し気な声だった。

全てが終ったあとで僕はどうしてキズキと寝なかったのかと訊いてみた。でもそんなことは訊くべきではなかったのだ。直子は僕の体から手を離し、また声もなく泣きはじめた。（第三章）

「私、あの二十歳の誕生日の夕方、あなたに会った最初からずっと濡れてたの。そしてずっとあなたに抱かれたいと思ってたの。抱かれて、裸にされて、体を触られて、入れてほしいと思ってたの。そんなこと思ったのってはじめてよ。どうして？　どうしてそんなことが起こるの？　だって私、キズキ君のこと本当に愛してたのよ」

「そして僕のことは愛していたわけでもないのに、ということ？」（第六章）

ここに「直子」の苦悩の核がある。「直子」が心から求めていた「キズキ」を彼女の体は拒否する。「キズキ」が高校生の時「僕」と知り合って不思議な三角関係が生まれた後も、「直子」の体は拒否し続ける。そして、何も言わず「キズキ」は自殺してしまう。「直子」は愛していた恋人の性を受け入れることが出来ず死なせてしまったという罪悪感を持つことになる。その罪意識は、「直子」が「僕」にだけ性

関係を持つ状態へと体が反応したことにより増幅する。いわば、これが「直子」の原罪であった。

しかし、「直子」はその罪意識を越えて、「僕」のことをかけがえのない男性であると感じていた。「直子」は精神面（心）も「僕」を愛していたと考えられるのである。

加藤弘一[9]氏が次のように述べている。

> 人生の旅半ばの年齢で回顧するという趣向によって盲点化されているが、ワタナベの加害性は覆いようもない。彼は緑とのデートを逐一直子に書き送っている。彼を信じようと努力し、彼への信頼を手がかりとして世界との基本的な関係を再建しようとしている彼女にとって、これがどんなに致命的なことか。ワタナベの二回目の訪問の後、快方に向ったかに見えた症状がにわかに憎悪するのは偶然ではない。この時の訪問がひどくそっけない書き方しかなされていないことも、単に繰り返しを避けたというような問題ではあるまい。あのそっけない書き方は、ワタナベの心がすでに緑にむかっており、直子は視野の外に追いやられていたということを裏側から示している。心の病によってただでさえ被害的になっている直子がこの変化に気がつかないはずはない。事実、緑との関係が深まるに比例して、直子はどんどん追いつめられ、決定的な事態へ進んでしまうのである。

私も加藤弘一氏の述べるように、「僕」の「緑」への愛が「直子」を追いつめ、自殺へと向かっていくと考えている。しかし、「直子」の「僕」に対する愛情の吐露と嫉妬の感情はもっと早い場面から現れている。「僕」の一回目の訪問の後、「緑」の父のことを書いた手紙を読んだ時点から、「直子」の病は悪い方向に向かっているのである。この過程を今一度検討してみる。

> 直子は僕に一度だけ好きな女の子はいないのかと訊ねた。僕は別れた女の子の話をした。良い子だったし、彼女と寝るのは好きだったし、今でもときどきなつかしく思うけれど、どうしてか心が動かされるということがなかったのだと僕は言った。たぶん僕の心には固い殻のようなものがあって、そこをつき抜けて中に入ってくるものはとても限られているんだと思う、と僕は言った。だからうまく人を愛することができないんじゃないかな、と。
> 「これまで誰かを愛したことはないの？」と直子は訊ねた。
> 「ないよ」と僕は答えた。
> 彼女はそれ以上何も訊かなかった。（第三章）

> ときどきこんな風に思います。もし私とあなたがごく当り前の普通の状況で出会って、お互いに好意を抱きあっていたとしたら、いったいどうなっていたんだろうと。私がまともで、あなたもまともで（始めからまともですね）、キズキ君がいなかったとしたらどうなっていただろう、と。（第五章）

> 「あたりまえでしょう」と直子はあきれたように言った。「あなたそんなこともわからないの？　そうじゃなければどうして私が

あなたと寝たのよ？　お酒に酔払って誰でもいいから寝ちゃえと思ってあなたとそうしちゃったと考えてたの？」（第六章）

ここでは、「僕」の女性関係を問う姿、「キズキ」がいない場合の「僕」との恋愛関係を想像している姿、性関係の相手が「僕」であることの必然性を述べる「直子」の姿がある。そして、「直子」は自らの病が治るまで「僕」から他の女を排除していて欲しいと願い、そのために自らを変えようと考えてもいた。

「ねえ、ワタナベ君？」と僕の耳もとで直子が言った。
「うん？」
「私と寝たい？」
「もちろん」と僕は言った。
「でも待てる？」
「もちろん待てる」
「そうする前に私、もう少し自分のことをきちんとしたいの。きちんとして、あなたの趣味にふさわしい人間になりたいのよ。それまで待ってくれる？」（第六章）

「キズキ」自殺後、東京で再会してから「直子」は「僕」を心の支えとしていた。それは他の女性を排除して欲しいと願うまでにその依存は高まっている。そういった状況の中、阿美寮への一回目の訪問後、「僕」は「緑」の父親を見舞う。しかし、「緑」の父は亡くなり、そのことを「僕」は直子宛の手紙に書く。11月の「直子」の手紙には異変の徴候がみられる。

「あなたが東京に帰っていなくなってしまったのと秋が深まったのが同時だったので、体の中にぽっかり穴があいてしまったような気分になったのがあなたのいないせいなのかそれとも季節のもたらすものなのか、しばらくわかりませんでした。レイコさんとよくあなたの話をします。（中略）

ときどきそんな淋しくて辛い夜に、あなたの手紙を読みかえします。（中略）ミドリさんという人のお父さんのことを書いた部分なんて私とても好きです。（中略）

私もなるべく暇をみつけては手紙を書くように心懸けてはいるのですが、便箋を前にするといつもいつも私の気持は沈みこんでしまいます。この手紙も力をふりしぼって書いています。返事を書かなくちゃいけないとレイコさんに叱られたからです。でも誤解しないで下さい。私はワタナベ君に対して話したいことや伝えたいことがいっぱいあるのです。ただそれをうまく文章にすることができないのです。だから私には手紙を書くのが辛いのです。

ミドリさんというのはとても面白そうな人ですね。この手紙を読んで彼女はあなたのことを好きなんじゃないかという気がしてレイコさんにそう言ったら、『あたり前じゃない、私だってワタナベ君のこと好きよ』ということでした。（後略）」（第九章）

このように、「直子」は「僕」の女の影に苦しみ、「僕」に相応しい人間になろうとしていた。しかし、「緑」という、「僕」に影響力を持

つ女性を知ることによって、混乱が始まっていく。この手紙においても「力をふりしぼって書いて」おり、二度目に「僕」が阿美寮を訪問したときに「直子」が無口になっていたことも、このことと関係していると考えられる。

これらのことから、「直子」は苦しみながら「僕」を愛していたと言えるだろう。「キズキ」に対して「直子」は精神の愛を持っていた。しかし、彼女の体はそれを拒否する。そして、「直子」は「僕」と肉体関係を結ぶ。「直子」はその後、精神面（心）も「僕」への愛を持つことになる。しかし、「直子」は「キズキ」への罪意識から心も体も「僕」を愛していると認めることができず、苦しんでいた。その状態で「僕」に影響を持つ「緑」の存在を知り、「僕」の心が「緑」へ向かっていることに気付いていく。「直子」は「僕」への愛を吐露することができず、死へ向かっていくのである。「キズキ」の自殺に端を発した連鎖する死の構図がここにある。

三　緑への指向―「僕」の愛と罪―

次に第二の原罪、「直子」を死に至らしめた「僕」の過去の様相を「緑」との関係から検討したい。

「ノルウェイの森」の「僕」は、「直子」との約束を果たすため、文章を書くという責任を果たす男として設定され、その「優しさ」が強調されてきた。しかし、書かれた当時の「僕」は都合の悪いことを忘れることで人生を乗り切ろうとしていた。

「そうじゃないよ」と僕は言った。僕はただその町を離れたかっただけなのだ。でも彼女（引用者注　高校生の時の「僕」の彼女）は理解しなかった。そして我々は別れた。東京に向う新幹線の中で僕は彼女の良い部分や優れた部分を思いだし、自分がとてもひどいことをしてしまったんだと思って後悔したが、とりかえしはつかなかった。そして僕は彼女のことを忘れることにした。

東京について寮に入り新しい生活を始めたとき、僕のやるべきことはひとつしかなかった。あらゆる物事を深刻に考えすぎないようにすること、あらゆる物事と自分のあいだにしかるべき距離を置くこと――それだけだった。僕は緑のフェルトを貼ったビリヤード台や、赤いN360や机の上の白い花や、そんなものをみんなきれいさっぱり忘れてしまうことにした。火葬場の高い煙突から立ちのぼる煙や、警察の取調べ室に置いてあったずんぐりした形の文鎮や、そんな何もかもをだ。（第二章）

「キズキ」の死によって「直子」の心には逃れがたい罪意識（原罪）が刻み込まれたが、「僕」は「キズキ」の死や、傷つけてしまった女性に対する自らの行為などを（忘却）することで新しい人生を始めようとしていた。

そして「僕」は「緑」を愛することになる。先行研究では、「ノルウェイの森」における「緑」の役割について、「直子」ほどには充分に検討されているとは言えない。

これまで「緑」は「直子」とは対照的な存在（例、直子＝静、緑＝動）[10]として捉えられており、この対照はテクストの基本構図として考えら

れてきた。この構図とは異なる考え方として、前出の加藤弘一氏は、「緑」はレイコさんや永沢さん、突撃隊ら他の登場人物と等価で、「直子と緑の対比はこのような布置の一部（引用者注　言語とその行動の過剰さ、または希少さ）にすぎない」と論じている。また、「直子」と「緑」は同じ人間の表と裏であるというような同一人物的な論考[11]も存在する。これらの論考に共通することは、対照的という構図であろうが、同一人物という存在であろうが、「緑」はあくまで「直子」以上の存在となりえていないことである。

しかし、「僕」にとって「緑」という女性はもっと重要な存在なのではないか。初めて「僕」と「緑」が話をした場面において、「僕」は「緑」に強い印象を持っている。

「僕は今の方が好きだよ」と僕は言った。そしてそれは嘘ではなかった。髪の長かったときの彼女は、僕の覚えている限りではまあごく普通の可愛い女の子だった。でも今僕の前に座っている彼女はまるで春を迎えて世界にとびだしたばかりの小動物のように瑞々しい生命感を体中からほとばしらせていた。その瞳はまるで独立した生命体のように楽し気に動きまわり、笑ったり怒ったりあきれたりあきらめたりしていた。僕はこんな生き生きとした表情を目にしたのは久しぶりだったので、しばらく感心して彼女の顔を眺めていた。（第四章）

ここでは、初めて話した「緑」について、その生命観溢れる姿に引き寄せられている「僕」の心象がはっきりと述べられている。対して、「直子」との出会いの場面では、「僕」の心象は描かれず、「友人」の彼女という事実が語られていた。[12]この差異に着目すると、このエピソードは「僕」と「緑」との運命の伏線として置かれていると言える。そして、「緑」への愛を自覚した場面でその運命性は顕在化する。

僕はそれを求めていたし、彼女もそれを求めていたし、我々はもう既に愛しあっていたのだ。誰にそれを押しとどめることができるだろう？　そう、僕は緑を愛していた。そして、たぶんそのことはもっと前にわかっていたはずなのだ。僕はただその結論を長いあいだ回避しつづけていただけなのだ。（中略）

「僕は直子を愛してきたし、今でもやはり同じように愛しています。しかし僕と緑のあいだに存在するものは何かしら決定的なものなのです。そして僕はその力に抗しがたいものを感じるし、このままどんどん先の方まで押し流されていってしまいそうな気がするのです。僕が直子に対して感じるのはおそろしく静かで優しくて澄んだ愛情ですが、緑に対して僕はまったく違った種類の感情を感じるのです。それは立って歩き、呼吸し、鼓動しているのです。そしてそれは僕を揺り動かすのです。（第十章）

僕は緑に電話をかけ、君とどうしても話がしたいんだ。話すことがいっぱいある。話さなくちゃいけないことがいっぱいある。世界中に君以外に求めるものは何もない。君と会って話したい。何もかもを君と二人で最初から始めたい、と言った。（第十一章）

「ノルウェイの森」は、「僕」が本当は「緑」を愛していたと告白した物語といえる。先行研究では、「直子」と「緑」は対極である、または登場人物の一人である、「直子」と「緑」は同一人物といったように、「緑」は「直子」以上の存在としては捉えられていなかった。しかし、「僕」にとって「直子」と「緑」は等価ではない。「緑」こそが「僕」にとって運命の女性であり、かけがえのない存在であったことが結末部で語られている。

この物語は、冒頭に書かれているように、「直子」との約束を果たすための文章という考えが基本にある。しかし、実際は「直子」に対する「僕」の加害性は明確である。これが「僕」の犯した原罪である。「キズキ」の自殺、そして「直子」の自殺という原罪と死の構図は、「僕」と「緑」との関係をも巻き込むことになる。つまり、冒頭における「緑」の影の不在に第二の原罪が関係してくるのである。

冒頭に「緑」の影が感じられないことについて、これまでも様々に疑問として提示されてきた。黒古一夫氏は「物語の冒頭に戻って、三十七歳の『僕』が一人でドイツに行こうとしていることを考えると、つい『緑はどうしたんだ』と問いかけたくなってしまう。結局『緑』とは一緒になることはなかったのではないか」[13]と述べ、木股氏も次のような推論を立てている。[14]

「僕」と緑が結婚していれば、直子の記憶と日々向かいあうことになる。直子ではなく、結果的に緑を選んだという気持ちのしこりが「僕」には、残っているにちがいない。だから、緑と結婚している「僕」が三十七歳になって、直子の死の意味を考えなおす手記を書き始めるのは、少し無理があるかもしれない。

結局、「僕」は、ずっと一人で生きることを選んだのにちがいない。それが直子の死に対する「僕」のいちばん正しい処し方なのだから。

私も「直子」の死に対する「僕」の罪悪感（第二の原罪）が「緑」を選ばせず、「僕」は三十七歳までの孤独な生を生きることになったと考えている。

最後にもう一度、「僕」が「直子」と「緑」との過去を記録すること、更にその記録が何のために行われたかということの意味を考えてみたい。

おわりに―「緑」への手記―

三十七歳まで「僕」は、「キズキ」の死の時のように、罪悪感に苛まれながらも努めて〈忘却〉することで生を構築しようとしていたと考えられる。しかし、ビートルズの『ノルウェイの森』を聞いたことで、「僕」は「直子」との過去を「起きろ、理解しろ」（第一章）と問われる。

しかし、「直子」との約束を果たすために文章を書き始めながらも、「僕」は本当は「緑」を愛していたことを告白していた。そして、「僕」自身が「直子は僕のことを愛してさえいなかったからだ」（第一章）と考えていたにもかかわらず、「直子」は「僕」を愛しており、その

ことを告白できずに死へと向かってしまった過程も描かれていた。「直子」の死は罪意識（第一の原罪、「キズキ」の自殺）を乗り越えることが出来ず、自らの愛を告白できなかったものである。同じように原罪（第二の原罪、「直子」の自殺）をかかえた「僕」も「緑」を選ぶことができず孤独な生を生きていると想像される。この手記には自らの愛と罪、「直子」に対する加害性と「緑」への愛を見つめる姿がある。

「ノルウェイの森」は、「僕」が二十歳の時「緑」に説明できなかった「直子」との関係を説明した「緑」へ向けた手記という捉え方ができないだろうか。つまり、「直子」の死の意味を理解した「僕」が、自らの罪を描くことで、自らの過去を全て「緑」にさらけ出し、新しい生を生きようと決意したということである。

これは、加藤典洋氏が述べるような〈内閉からの回復〉[15]という生やさしいものではない。漱石「心」の先生が「私は今自分で自分の心臓を破つて、其血をあなたの顔に浴せかけやうとしてゐるのです」（五十六）[16]と決意し、遺書を書いたように、「ノルウェイの森」は「僕」が自らの罪深い過去を血を流すように全霊を賭けて書いた手記なのである。「僕」は失ってしまった「緑」のために、分岐点になった上野駅に戻り「緑」を呼び続けている。ここには、死への指向ではなく、生へと向かう、つまり愛を選び取った究極のエゴイズムの姿がある。つまり、テクストには「直子」を犠牲にしてまでも「緑」への愛を吐露した「僕」のエゴイズムがあり、その意味で「ノルウェイの森」は「一〇〇％の恋愛小説」（帯の作者の言葉）なのである。

注

（1）「『ノルウェイの森』―回想される（恋愛）、もしくは死―」（『村上春樹―OFFの感覚―』平2・10、星雲社）

（2）「村上春樹『ノルウェイの森』論」（平3・12『近代文学試論』）

（3）「手記としての『ノルウェイの森』」（平4・2『昭和文学研究』）

（4）「（喪失）、もしくは（恋愛）の物語」（『村上春樹　ザ・ロスト・ワールド』平5・5、第三書館）

（5）「世界への回復・内閉への連帯」（『イエローページ　村上春樹』平8・10、荒地出版社）

（6）竹田青嗣氏は、「単なる恋愛小説ではなく、むしろ恋愛を不可能にする〝自閉〟のテキストとして編まれている」とする。（「〝恋愛小説〟の空間」平元・8『群像』）

（7）「非『恋愛小説』としての『ノルウェイの森』」（『村上春樹、転換する』平9・11、彩流社）

（8）「『ノルウェイの森』と『たけくらべ』」（平2・9『ユリイカ』）

（9）「異象の森を歩く―村上春樹論」（昭63・11『群像』）

（10）注6の竹田青嗣氏など。

（11）柴田勝二氏は「ノルウェイの森」を三島の「豊饒の海」のパロディとして位置づけ、「緑」が「直子」の生まれ変わりとする大胆な仮説を提示した（「生き直される時間　『ノルウェイの森』の（転生）」平14・1『文学批評　敍説Ⅱ』）。

（12）「僕」が「直子」と初めて会った時の場面を引用する。

はじめて直子に会ったのは高校二年生の春だった。彼女もやはり二年生で、ミッション系の品の良い女子校に通っていた。あまり熱心に勉強をすると「品がない」とうしろ指をさされるくらい品の良い学校だった。僕にはキズキという仲の良い友人がいて（仲が良いというよりは僕の文字どおり唯一の友人だった）、直子は彼の恋人だった。（第二章）

「今度の日曜日、ダブル・デートしないか？　俺の彼女が女子校なんだけど、可愛い女の子つれてくるからさ」と知りあってすぐにキズキが言った。いいよ、と僕は言った。そのようにして僕と

直子は出会ったのだ。（第二章）

（13）注4に同じ。
（14）注3に同じ。
（15）注5に同じ。
（16）引用は『漱石全集』第九巻（平6・9、岩波書店）による。

テキストは『ノルウェイの森』上・下（昭62・9、講談社）に拠る。傍線は私に付した。

（やまね　ゆみえ、広島大学大学院博士課程後期在学）